

森毅著「数学受験術指南——生を通じて役に立つ勉強法——」中公文庫 中央公論社 2012年9月25日刊  
を読む

1. 「他人にめいわくをかけない人間になれ」と言われている。しかしぼくは、こうした言葉に、どうも、うさんくさい感じを持ってしまう。
2. まず、人間というものは、かならず他人にめいわくを、かけあって生きていくものではないだろうか。早い話が、きみが志望の学校に入学したとすると、きみが入学したために合格定員からはみだして、落第する人間がかならずいる。彼にとって、きみはめいわくな存在だ。
3. いままで、たいていのおとなは、そうした意味では、他人にめいわくをかけて生きてきたはずだ。それを、「他人にめいわくをかけるな」なんて、どうもしらじらしい。
4. 受験とか就職とかいった、制度的なものを否定したところで、やはり、めいわくをかけあっている。きみの友人は、きみにたいして気をつかうし、きみの親は、きみを育てるために苦勞する。ただし、こうした場合では、きみがめいわくをかけることが、きみと他人との人間関係であって、それがそうした友人とか親とかいった他人と、きみとの関係を取りむすんでいる。
5. つまり、人間というものは、めいわくをかけあいながら、他人との関係を取りむすんでいくものだ、とぼくは考えている。めいわくをかけることを断念するというのは、関係を断ちきることにひとしい。
6. 実際には、「他人にめいわくをかけていない」と断言する人だって、他人と関係を持つてる以上は、そうに違いない。そこでは、むしろ、自分の存在が他人との関係では、めいわくでもあるという自覚がない、といった、むしろ思いあがった態度を、ぼくは感じてしまう。
7. 生きていくということは、山の中で隠者にでもなるのでないかぎり、他人にめいわくをかけずにはおれないものだ。隠者になるのにさえ、あるいは自殺してさえ、彼に家族や友人があったとしたら、彼らにとってのめいわくになりかねない。
8. しかし、ここでぼくが言いたいのは、逆の問題である。他人のめいわくになるのではないかと、いじけることはつまらない、そうしたことを主張したいのである。とくに、なんらかの障害などを持った人間にたいして、これは差別をうみだすのに役だっている。

9. どんな人間だって、他人にめいわくをかけずにおれないのだから、ひっそり生きることなどを、目ざしてはいけない。他人にめいわくをかけながら、他人との関係を取りむすぶことが、きみが生きていくことだ。

10. みんなにめいわくをかけることで、みんなと関係を取りむすんで、そして、この人間の社会をみんなで作りながら、生きていこうじゃないか。

P.193 ~ 195

[コメント]

数学者で京都大学教授の<sup>もりつよし</sup>森毅先生の人生論入りの数学授業指南はためになる。是非、御一読を。

— 2014年10月22日 林 明夫記 —